自由連想

菊村　到

連想

菊村 到

新潮社版

自由連想

昭和三十五年九月二十一日印刷
昭和三十五年九月二十五日発行

定価 二八〇円

著者 菊村 到

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(三二六〇)七一一一～九五
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものはお取替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社　製本・神田加藤製本所
© I. Kikumura Printed in Japan

自由連想

装幀　関野準一郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章

一

教授のことばはときどき、ふっととぎれるようであった。しかしそういうときでも、教授の、うすい唇はぴくぴくうごいていた。そこからなにもことばがもれてこないのに、こまかくひきつるようにうごいている唇を見つめているのは、つらかった。それは森住を疲れさせた。教授のうごく唇は森住に草をかむうさぎをおもいださせ、森住はしばらくうさぎのことを考える。

うさぎはたしか水をのませてはいけなかったんだな、うさぎに水をのませると死ぬというのはほんとうなのか、ほんとうなんだろうな、あれはどういうことなのか、なぜうさぎは水を飲むと生きていられなくなるのか、うさぎははこべがすきなんだな、そういえば、子供のころうさぎに食わせるためにはこべをつみに行ったことがあった。

森住がそんなことを考えていると、教授の唇からはちゃんとことばが送りだされていて、森住はあ

わてて鉛筆をとりなおす。けれどもそのときには森住のほうに空白ができていて、教授の話はそんな森住の空白には、おかまいなしにどんどんすすんでいるから、けっきょく空白はうずめられることなしにそのまま残されてしまう。

森住はじりじりしながら、教授のことばをききとろうとする。けれどもいちどそういうふうに話す者と聞く者とのあいだのテンポがくるい、リズムがみだれてくると、どうにも収拾がつかなくなる。森住はもうどうでもいいや、という気になって、ぼんやり教授の唇や眼や鼻や眉や耳やそれからもっといろいろなものに視線をさまよわす。

「どうしたんです」ふいに教授が言った。「どうしたんです、いったい。まるでぼくのこのへんになにかくっついているとでもいうふうじゃないですか」

教授は腹立たしげに小鼻のわきのあたりに指をあてた。

森住はそう言われると、もうすっかり赤くなり、どぎまぎとりみだしてしまう。全く気の毒なくらい森住はからだをこわばらせる。

「いえ、べつに」と森住はかすれた声で言った。「どうぞ、おつづけ下さい。どうぞ」

教授はちょっと不安そうな眼を森住に向けていたが、ふたたび自分のテーマにかえって行く。

「いいですか」と教授は言った。「そういうわけで、ぼくは昔から子供たちには一定の金額以上のものは渡したことがないんです。まい月、一定のわくのなかで自分たちの消費生活を合理的に設計して行くという訓練を子供たちにこころみているわけです」

そのとき、教授の卓上の電話が鳴った。教授は電話機をとりあげると、

「そうです、そうです」と言った。

それから森住のほうを見た。森住は、もしかしたら教授は、ぼくのことを邪魔だと感じているのかもしれないとおもった。

さあ、きみ、用がすんだら、さっさと帰りたまえ、教授の眼がそう言っているような気がして、森住はあわてて立ちあがった。

「どうも——」

と森住が言いかけたとき、教授はちょっと緊張した顔になって、電話の相手に、

「そうなんだ、それで、こちらも困っている」

とやや強い調子で言った。

そのために森住はあいさつのことばを言いそびれたかたちになり、ぴょこんとあたまをさげると、逃げるように扉の外へ出た。

廊下には学生たちがうようよしていた。背広を着たのもいれば、女子学生もいて、終戦直後の混乱期に学校を卒業した森住にはかれらがひどく開放的にみえた。

教授の個室は二階にあった。森住が階段をおりようとしたとき、かれは背中に妙な圧力をおぼえた。

なにかぼってりしたものが背中におおいかぶさるようにしてこちらのからだをぐいぐい押してくるようでもあり、また逆にうしろへひきもどそうとしているようでもあった。

森住は上体をゆすぶってそんな自分の背後にくわえられてくる圧力を、はねのけようとした。

「きみ！」

と森住の首すじのあたりで声がした。

森住はびっくりして、首をうしろへまわした。おどろいたことに教授がしっかり森住の肩をおさえつけているのだった。森住はすっかり困惑してしまった。いま自分と教授とのあいだにおこっていることがらがよく理解できなかった。
「きみ、ずいぶん」と教授は声をはずませて言った。「ずいぶん、失礼じゃないか」
「えッ」
「え、じゃないよ、きみ、ちょっと来たまえ」
森住は教授に腕をつかまれて二、三歩ひきもどされた。
「きみ」と教授は廊下の壁に、森住のからだを おしつけるようにして言った。「きみは 全く礼儀を知りませんね。ひとが電話をかけている最中にろくすっぽあいさつもしないで帰るというのは、どういうわけです。きみは、あいさつの仕方も知らないのか」
「ああ」
森住はおもわずひくくうめいた。
「ああ?」と教授は言った。「ああと言ったんだな、きみは」
森住は苦しくて息がつまりそうになった。教授はやっと森住の腕をはなした。
「ぼくは、いないほうがいいとおもったんです」森住はあえぎながら言った。「ぼくがいると電話のお邪魔になるのではないかとおもったんです」
教授はふいに笑いだした。
「きみは、つまりぼくがひとに聞かれてはまずいようなことをしゃべるとでもおもったんですか。きみがもしそこまでこまかく気を使うんだったら、なぜ、あんなにらんぼうにドアをしめて行かなけれ

ばならなかったのか。あれではまるでぼくを侮辱したとしかおもえないじゃないか」
そのとき、森住は異様な衝撃が突然自分をとらえるのを感じた。自分の感情とは無関係に、深いおえつがこみあげて、胸をふるわせはじめたのである。
森住は自分でも、いま自分をとらえているものがなんなのか、よくのみこめなかった。あきらかに教授の表情に困惑がひろがった。困惑は羞恥や不安や同情やれんびんや、そのほか雑多な感情とまざりあって、教授の顔をゆがめてしまった。教授と森住とのまわりを学生たちがしずかにとりまいていた。
森住はしゃくりあげた。涙が信じられないほど多量にあふれ出てきた。そのくせ少しも悲しくはなかった。
「もういい」と教授は言った。「わるいとおもったら、それでいい。泣かなくてもいい、泣かなくても」
教授はそれだけ言うと、
「ああ、きみたち」
まわりを遠巻きにしていた学生たちのほうをふりむいた。
「だれか、このひとを門のところまで送って行きたまえ」
それから、
「あ、きみ、きみがいい、きみ」と言い、ひとりの女子学生のほうに指をつきたてた。
女子学生はべつにわるびれるふうもなく、前に進み出た。
「すまないが」と教授は女子学生に言った。「このひとを送って行って下さい」

女子学生はうなずくと、森住の前にまわり、かるく一礼した。
「さあ、まいりましょう」
と彼女は言った。
教授はすでに自分の室のほうに向って、足早に歩きはじめていた。森住はズボンのポケットからハンカチーフをとりだすと、涙をふいた。
女子学生は先に立って階段をおりはじめた。森住は少しおくれて階段をおりて行った。なんとなく、にやにやしながら学生たちがそんなふたりをながめていた。
「どうなさったんですか」
階段をおりたところで女子学生が聞いた。顔いろもわるく、やせて、胸なんかぺちゃんこで、お尻の線もそぎたてたようになっているくせに声にはふしぎなまるみがあった。
「ぼくにもわからないんです」と森住は言った。「きゅうに涙が出て来たんです」
「そんなことってあるのかしら」
「あるんです。げんにあったんです、このとおり、ね」
「たぶん、くやしかったからでしょう」
「さあ、そいつはどうかわからない。ぼくはくやしいなんておもいませんでしたからね。悲しいともおもわなかった」
「それでしたら、泣くことなんかないじゃありませんか」
女子学生はのどのおくで声をやわらかくまるめて、それからゆっくりはきだす、といったふうな感じの笑い声を立てた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「だから、ぼくにも、わからないんです。もしかしたら、ぼくは病気かもしれない」
ふたりは校庭に出た。時計台の時計が三時五分前を示している。午後のやわらかで明るいひかりが校庭にたっぷりひろがっていて、ひとくちに言えば、学生たちは幸福そうであった。
「ぼくはどんなにぼろくそに言われても、あの大浦さんをうらもうとはおもわない」
歩きながら森住は言った。
「あのひとは、悪いひとじゃないわ」少女はおとなっぽく言った。「あのひとは、かんしゃくもちでそそっかしくて、それにたいへんなエゴイストだけど、わるいひとじゃないわ」
「わるいひとだったら、あんなふうに、わざわざ、あとを追いかけて、ぼくの肩をおさえるようなことはしない」
「でも、なぐられなかっただけいいわ」
「なぐる？」と森住は言った。「なぐるんですか」
「おくさんをなぐるって言うわ」
「おくさんを？」と森住は言った。「おくさんをなぐる。ああ」
「見たひとがいるって言うわ」と少女は言った。「学生の前でおくさんをなぐったんですって。あのひと、全くすごいって言うわ。二階から」
「二階から？」
「二階から、いろんなものをほうり投げるんですって」
「いろんなものを？」
「本だとか、灰皿だとか、座ぶとんだとか、枕だとか」

「枕？」
「寝室は二階にあるのよ」
「きみ、大浦さんのうちへ行ったこと、あるんですか」
「あるわ」と女子学生は言った。「でも私、まだ大浦さんの夫婦げんかは見たことない。二階からなんでもほうり投げるって言うわ。投げるものがなくなると、おしまいに自分がとびおりるんですって」
少女はまるい声で笑った。
「あなたはいいひとですね」と森住は言った。「笑い声でわかりますよ」
そのとき、ふたりは正門のところへ来ていた。
女子学生は男の子のようにからだをぽきんと折るような仕方で、おじぎをした。
「ここまでなんですか」森住は失望のいろをはっきりみせて言った。「ここからさきはぼくにひとりで行けというんですね」
「じゃア」と少女は言った。「もう少し先までおともしますわ」
「ありがたい」と森住は言った。「ぼくは、むしょうにだれかがそばにいてほしいとおもうときがあるんです。ひとりぼっちで置かれると、不安でたまらなくなるんです」
「寂しがり屋さんなのね」
「でも、ある場合には、ひとりぼっちになりたくてたまらなくなるんです。犬の子一ぴきそばにいてもらいたくないとおもうんです。いやでいやでたまらなくなっちゃうんです」
「なにが」と女子学生は言った。「いやになるんですか」

「いろんなことがですよ。ありとあらゆることがですよ。なにもかもがですよ」
少女はちょっと気味のわるそうな顔をした。からだを森住から少しはなすようにして歩きはじめた。
「ぼくはたぶん病気なんだ。どこかがいたんでいるとおもうんです。いま、ぼくにはいろんなことがおころうとしているんです。いろんなことがね」
少女はだまっていた。少女はどこでこの奇妙な男と別れるきっかけを見つけだそうかと思案しているようであった。
「あなた、疲れませんか」
と森住は言った。
「いいえ」と少女は言った。「でも、私、もう教室へもどらなければなりませんわ」
「そうですか」森住は残念そうに言った。「では、ここで失礼しましょう。でも、おさしつかえなかったら、お名前を聞かせていただけませんでしょうか。ぼくは森住と言います」
森住は上衣の内ポケットから名刺を出すと、女子学生にわたした。
買物ニュース・編集部・森住昌造としてあった。
「私、久保和子です」
女子学生はぴきんとからだを折るようにおじぎをした。

二

森住は神保町の交差点までぶらぶら歩いて行った。かれは五時半に新橋でひとりの男と会う約束になっていた。

まだちょっと時間があった。かれは神保町から都電に乗って数寄屋橋まで出るつもりだった。信号が青になったとき、かれの足は三崎町のほうに向っていた。自分の足が三崎町のほうに向って行くということに、森住は苦痛を感じた。

まだ時間はありあまっているのだから、三崎町まで歩いて、そこから電車に乗ってもいい、そうかれは自分に言いきかせた。かれの足どりはしかし、だんだん重くなりはじめた。途中で、かれはついに立ちどまってしまった。もういちど、神保町まで戻ろうか、とおもう。けれどもどうしても三崎町まで行ってみようという気持もある。

かれはふたつの方向に自分のからだがひきさかれるのを感じる。かれは神保町と三崎町のちょうどまんなかのあたりで立ちどまって、自動車の行きかい、ひとの流れ、都電の往来などをぼんやりながめていた。

あの少女は教室にかえって行った。教室であの少女、久保和子はいったいどんなふうなんだろう、大浦教授の教え子である以上、彼女も文学部の学生なのだろうが、いったい彼女は何を専攻しているのか、大浦教授は彼女にどんなことを教えるのか、彼女はまた教授からなにを吸収しようというのか。

森住はきょうのインタービュウが全く不首尾におわってしまったことで気が重かった。
このごろではなにをやってもうまくいったためしがない。ぼくはほんとうに病気なんだろうか、森住はそうおもう。
いくら相手のことばに耳をかたむけていても、相手の話の内容が全く理解できない場合がある。そんなとき、自分をとらえてくるいらだちにじっと耐えるというのは、たいへんな苦行のようであった。
こんなに一生けんめい、聞いているのに、相手のことばがはっきり意味をもったことばとして理解できない、とおもうときの息苦しさといったらなかった。
いまこの男はこう言ったんだな、こんなことを言ったんだな、たしかにこの男はいまこう言ったぞ、そんなことをたえずはらのなかでくり返していく。
そしてはっとおもったとき、ことばはなにひとつ森住の意識の底にまで降りて来てはいないことを発見する。それはつらいことだった。
こんな状態がこのままつづくようでは、いまの仕事もそう先がながくはないだろう、とおもう。そうだ、そう先がながくはない、だとすれば、こんなところで、ぼやぼやなんかしていられないぞ、そら、歩け、出発だ。
森住は歩きはじめる。足は三崎町のほうに向っていた。だんだん胸が息苦しくなってくる。その息苦しさは電車通りに面したパリ洋装店の前をとおりすぎるとき、最高潮に達した。
森住は店の前をほとんどかけ足のようにしてとおりすぎた。とおりすぎて三崎町の停留所に達したとき、ほっとした。胸がどきどき鳴っている。

いま、見られはしなかったろうか、と森住はおもう。まるで犯罪者が交番の前を足早にとおりすぎるみたいに、小走りに走ったときの自分を、パリ洋装店ではたらいている妻の順子にみられはしなかっただろうか、とおもうと、いても立ってもいられないような気持になるのだった。

順子はもしかしたら、ぼくが彼女のようすをさぐりに来たとでも、おもうかもしれない。おもわれても仕方がないかもしれないが、事実はそうではないのだから、そうおもわれては具合が悪い。

森住は、順子に見られたかもしれない、とおもうと、それが気になってたまらなくなった。もういちど、さっきのようにパリ洋装店の前をとおりすぎてみようか。さっきは、無我夢中でわきみもせずに走りぬけてしまったが、こんどは横目を使って、順子がはたしてこっちに気がつくかどうかをはっきりたしかめなければならない。

もういちどやってみようか。しかし、もしかしたら、さっきは全く気づかれずにすんだかもしれない。それなのにこんどもういちどやってみて、かえってみつかってしまうということだって大いにありうる。それではわざわざ藪をつついて蛇をだすようなものではないか。

森住は、そんな藪とか蛇といったような手垢のついた比喩の厄介にならなければならない自分の思想の貧しさにうんざりした。こういう場合、久保和子だったら、なにかうまいことばを見つけだしてくれるかもしれない。森住はまるみをおびた、からだに似合わぬ張りとつやのある久保和子の声やぽきぽきしたおじぎの仕方をおもいだした。

そのとき数寄屋橋行の都電が来たので、森住はそれに乗った。かれは電車の窓から、パリ洋装店のほうをながめた。しかし店の硝子戸がひかっていて、内部はよくわからなかった。

森住は座席があいていたので、腰をおろした。それから、ゆっくり車内を見まわした。どこかに知

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.